



# ピッポ新聞

2005  
6  
No.200

子どもの本専門店

年間購読料 (送料込み) 1500円  
編集・発行 伊藤俊男

## ピッポ

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3  
TEL & FAX 0543-45-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>  
Email [pippo@diana.dti.ne.jp](mailto:pippo@diana.dti.ne.jp)

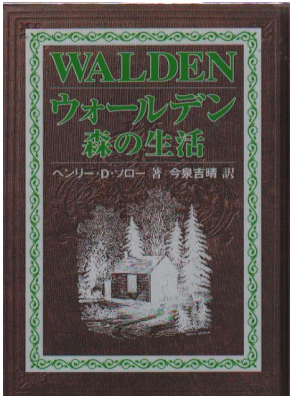
### ピッポ新聞2000号記念特集

#### ソロー シートン 今泉吉晴 3人のナチュラリスト

「・・・4歳の小さな男の子がしっかりと椅子に腰掛け、キラキラした二セント版のシンデレラを読む姿が、すでにその始まりです。」

この種の安手の本は、子どもの発音やアクセントを改善することもなく、想像力を育みもしません。ただ、目を弱め、生命維持に必須の循環機能を沈滞させ、あらゆる知的能力を脱落させます。このような菓子パンが、毎日、価値ある純粋の小麦粉パンや、ライ麦パンとトウモロコシ粉のパンより、はるかに多く焼かれ、ちゃんと売れてしまうのです。」

冒頭のこれは、D・H・ソローの『ウォールデ



ン 森の生活』 (今泉吉晴・訳 小学館) の第3章「読書」の一部です。ソローは今から約150年前にこの本を著したのですが、このソローが

言った内容は現在そっくり同じ指摘をしたとし

ても、そのまま的確な子ども本の現況に対する指摘として通用することでしょう。デコレーションされた砂糖菓子のような子ども本が氾濫するなかで、ソローが言うところの純粋な小麦粉パンやライ麦パンのような本は少ないのですが、これらを読者に届けることこそがピッポの仕事だと改めて感じています。

動物生態学者の今泉さんが訳したり、書いたりしたシートンや・ソローの新訳本や評伝などは、その小麦粉パンの数少ない本なのです。僕がシートンやソローに至ったのは今泉さんの訳した「シートン動物記」(福音館書店)、「シートン動物誌」(紀伊国屋書店)や「ウォールデン 森の生活」(小学館)を通じてです。

シートンの動物を観察する優しい目や、ソローの森の中で自然と関わり、物を考える態度こそが、今泉さんが山梨県の都留市の山の中で観察のための山小屋を建て、森の生き物の生態を観察し、学ぶ態度そのものであることに気がかされました。

そこで、ピッポ新聞2000号記念号に当たって、この3人に焦点をあてて店内でイベントを開催することといたしました。併せて、今泉さんに本号への寄稿をお願いしました。

ソローやシートンの古書や関連図書・シートンの直筆のサインの入ったタイプの手紙や自身が描いた「オオカミ王ロボ」の絵のプリントなど関連グッズも展示します。シートは優れた画家でもありましたが、描かれた多くの動物たちの絵は一見に値します。期間中どうぞ店へいらしてください。お待ちしております。

# 今を生きる名ガイド、シートンとソロー

今泉吉晴

ナチュラリスト 都留文科大学  
地域交流センター 特別非常勤講師

私がシートンとソローの二人の先人を敬愛するようになったことには、はつきりわけがあります。私は子どもころから、人から教わるのが好きではありませんでした。泥遊び、ザリガニ採り、花壇づくり、動物の飼育、工作、昆虫採集、洞穴探検、写真、山登りなどなど、やるのがたくさんあって、学校でも、人からも、ものを教わる暇がなかったからでしょう。ところがそんな私にも、一つだけ、教えてほしいことがありました。それが、好きなことの意味でした。ところが、たいいの人は、好きなことをしてはいけけない、もっと勉強しろ、というのです。



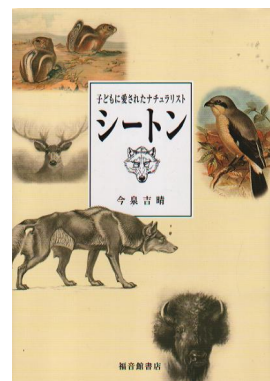
私はとても小さな子どもころから、泥遊びが好きで、中でも水を流し、泥をこねる遊びが好きでした。やがて私は清らかな水が湧き出す泉にそこが

れました。それに地中にトンネルを掘ってくらすヒミズという小さなモグラが好きになって、ついには、ヒミズがすむ森がほしくなりました(ヒミズは森にしかいません)。つまり、泉のある森を手に入れ、山小屋を建てて動物の研究をしてくらしたい、というのが夢になりました。長い年月がかかりましたが、私は森を手に入れ、山小屋を建て、泉から水をひきました。すると、私が夢に描いた想像と空想を越えた、自然ともにくらす面白さと価値を、森は楽しく教えてくれました。空気が湿気をはこび、山の斜面が雨を受け止め、泉が湧くというつながりが手にとるように分かりました。私は、森で好きなことをする意味を伝える人(あるいは書物を)ますます求めていました。

こう書けば、シートンとソローこそ、そのように好きなことをする意味を伝える人、という人もおられるでしょう。ところが、私は動物の研究をして、頭を固くしていました。シートンとソローを読んでも、考えがピンとこなくなっていました。

私がシートンとソローに親しみをもったきっかけは、インターネットで外国の本が自由に手に入るようになったことです。インターネットで手に入れた、シートンの本を読んで私は、例えば、シートンが動物を「好き」とはいわず、「愛している」と書いていることを知りました。日本語でシートンを読むと、「愛している」を「好き」と訳してあって、読み過ぎしていました。ところが、英語では「愛している」と書い

てあって、私ははっとさせられたのです。私は動物や自然が好きと思っていただけで、「愛している」という方がぴつたりだ、と教えられたのです。



シートンは「私は喉の渇きの苦しみを知っているから、他の人のために井戸を掘る」といつています。つまり、私(シートン)は「愛している」から知

たいという考えはいけけない、といわれる苦しみを知っている。そこで、他の同じ苦しみを持つ人をいやす井戸を掘る、というのがです。私はシートンの考えにひかれ、シートンの本こそ、「好きなことをする」意味を明らかにして、あらゆるものとできごとを尊重する平和主義の本と、知りました。

私はシートンの本を数多く読むうちに、シートンの喉の渇きをいやした本とは、ソローの「ウォールデン」と知りました。シートンの本は「ウォールデン」の美しい言葉で彩られています。特に「サンドヒル・スタッグ」は、シートンが「ウォールデン」を手に、カナダの森を歩いた本、といつてもいいくらいです。

みなさんも、シートンの本、ソローの本を手にとり、自然にあいにかけてはいかがでしょう。科学は大切ですが、科学だけでは絶えず変化する自然をまるごと捕らえることはできません。シートンのアーティス



トの言葉、ソローの詩人の言葉の助けをかりることで、私たちは個性豊かに自然を自分のものにし、今を簡素に、豊かに生きる勇気を持てます。私が二人の本を読んで、いつも不思議に思うのは、偉大なシートンとソローが、誰よりも身近に感じられるという事実です。

私は、今、シートンとソローの言葉にはげまされて、勤めをやめて(若い日に決断したソローにはるかに遅れてですが)、森で感覚を楽しませ、大きく繊細に、自然を知っていいこうと、自分の本当の仕事に取りかかったところです。と、きばって何でもみてやるう、というのではありません。できることはごく限られています。限られてはいても、子どものように存分に楽しみたい、それが一番、というのが今の私の考えです。

昨日は、一日、森を流れる沢水で遊び、石をころがし、流路をととのえました。こうして、自分がよいだろう、と感じるやり方が、どんな風に沢をつくり、そこにすむ生きものを豊かにし、そのことを通して自然が分かっていくか、その手応えを私は感じとっていききたい、と願っています。



## ピッポ新聞200号に 寄せて

### 丸ごと人間・ピッポさん

倭男さんと私の出会いは嵐の中の雷といった激しいものでした。注文した本を取りに行ったとき、言葉の誤解から倭男さんにもすごい剣幕で怒られたのです。私は目がまわるほど驚き「なぜ怒られなきゃならないの?」と思いました。これがピッポさんの第一印象です。結局奥様の秀子さんが必死にとりなし、倭男さんは経緯を理解した途端少年のように素直に詫言いました。人間むきだし、商売つ気なし。こんな本屋って見たことない!と私はピッポの友人Tさんにぶちまけました。Tさんはこう言いました。「ピッポさん、またやったのね!全く子どもなんだから。でも、あの人のやっていることを見てやって。あの人が子どもの本屋で頑張っていることは地域の文化。この地域に子どもの本屋があるって、なによりも子どもたちにとって幸せなことじゃない?」その言葉は不思議な迫力がありました。その後、ピッポさんに通うようになりましたが、回数を重ねるに連れて、やさしい心遣いの秀子さんばかりでなく、じつは倭男さんが山の花のように繊細で、シャイでピュアであることもじわじわ見えてく

るようになりました。これほど第一印象が変化した人はいません。

じつは、本の品揃えを見れば、子どもを尊重している生き方がわかります。その品揃えの魅力が「子どもの本の店ピッポ」の一番の魅力であり、毎回古本も含めてどんな宝物に出くわすかわからないトキメキがあります。

ピッポ新聞で、倭男さんはあるときは山のことばかり書いたり、またあるときは数ヶ月も大型絵本を取り上げて疑問を追究したり、のびのびと新聞づくりをされていましたが、迫力ある持論を展開されたとき、どんなに胸をはって堂々としているのだろうと思つて店に入っていくと、みんなはどう思っのだろうか気にかけていました。自分の考えを正直に表現しているように見える倭男さんも実は勇気を振り絞っているのだ!と発見したとき、俄にうれしくなりました。こういう人間的な倭男さんが好きです。

喧嘩を吹っかけられたときブツンしないでよかったな!ぎりぎり秀子さんの内助の功とTさんに助けられたけれど・・・。

池上理恵 (静岡自然を学ぶ会 代表)

### 地域に根ざす子ども本の店

「ピッポ新聞」200号おめでとうござい

います。

5 月末に、興津川上流に行つてきました。新緑が美しく、清らかな川の流れる音や、初夏のさわやかな風の中で食べたお弁当のおいしかったこと。おまけに運良く二羽のヤマセミヤ、カワガラス、カワセミなどの溪流の鳥たちにも出会えました。

ふと、今の子どもたちも、こんな場所に身を置いて、「あー気持ちがいいなあ」と感じるができるだろうかと、疑問を持ちました。以前ここに来たときに、男の子二人が橋の袂に座つてそれぞれ手にしたゲームに夢中になつて見ているのを見て、「あふれる自然の中に居て、それでもゲームなの？」と愕然としたことがあります。

思えば、ピッポさんとの付き合いの中で心に残つて居るのは、春の山菜取り、夏の虫捕りや川遊び、秋のきのこ狩り等、自然の中で過ごした時間です。海野和男さんや村上康成さん、さとうち藍さんなどと、ピッポさんの企画で、山遊び、野遊びをしたこともたくさんありましたね。

ピッポさんの店には、いつも大人の目線でなく子ども目線で選ばれた本が並んでいるのは、ピッポさん自身の子どもの頃的生活体験が、自然や人とかかわりにおいで、豊かな楽しいものであったからに相違ありません。ピッポさんの店の本を存分に楽しめる子どもであるためには、子どもが、子どもとしての日常生活を五感を通して楽しむ体験、とりわけ友だちや自然とかかわりの体験をより多く積み重ねてあげることが大事だと思います。

「ピッポ古書クラブ」も意義深い仕事であると思いますが、それは大人相手の仕事。子どもの本の店「ピッポ」は、これから子どもや子育て中の親とかかわつて、地域の中で生き続ける本屋であつてほしいと願っています。

ピッポのおじさんおばさん（この表現は少し疑問です）、300号めざして、ますますのご活躍を期待しています。

川口三鈴 古くて新しい(?) 友人

## 批判する心をいつまでも!

ピッポさん「ピッポ新聞200号」おめでとございませう。

十六年と八カ月よくぞ続いたものですね。とすると、ピッポさんと私のお付き合いももう二十年近くになります。驚きです。手書きの新聞もピッポさんの個性そのもので、楽しいものでした。

新聞には、ピッポさん独特の論理を展開され、私にとって両手を上げて賛成できるものばかりではありませんでしたが、なんととはなしにどつぷりとつかつていて、当然と思つていたことに、「ちよつと待つて考えてみよう」というきつかけをいだいたような気がします。

新聞ではありませんが、店頭で、教育についてよく議論を吹きかけられました。

ある時は、文部省の末端として、またある時は日教組の一員として批判の矢面に立たされたこともありました。気弱な私(?)は、顔ではニコニコしながら、心の中で「そんなことを言つたつて、あなたも私達の立場に立つてみたら・・・」などと思つていたのでした。

最近、私もフリーの立場になり余裕をもつて話を聞けるようになりました。でも、ピッポさんのお付き合いの中で、より良い本をいち早く学校図書館に入れることができたり、本に関する情報をたくさん頂戴したり、ずいぶんお世話になりました。これからまた、300号目指して「ピッポ新聞」ぜひ頑張ってください。楽しみにしています。

森口ちづ子 (前静岡県子ども本研究会事務局長)

## ピッポのおじさん

皆さんに、お伝えすることがある。ピッポの店で言つてはいけないこと、それは、「ためになる、頭の良くなる本はありませんか?」である。そんなセリフをいつたことには、あ、ピッポのおじさんは、爆発してしまつたのである。ピッポのおじさんを理解している人は、なぜ爆発してしまつたか・・・よく、おわかりであらう。

ピッポのおじさんのぶつきらぼつな反応で何人のか弱いお客さんが、そそくさ店か

ら去っていったことか・・・。  
店の営業成績を思つと、考えてしまつが、  
今さら、ピッポのおじさんを変えることな  
んで、無理なのである。

でも20年つき合っている、私には、ピッポ  
のおじさんが実は優しく、単純で、少年  
のようで、駄洒落好きで、歌が好きで、山  
を愛して、かめばかむほど味がでる。そし  
て、絵本を語らせるたら日本一の素敵なお  
じさんであることを知っているのである。  
(これってほめ殺しではないの、摩見ちゃ  
ん)

もっと、このことを皆さんにわかつてほ  
しいのである。それにはおじさんと根気よ  
くじっくりとつき合っていくことが大事で  
ある。ま、とにかく、私の人生はピッポの  
おじさんと出会ったことで、より豊かに楽  
しくなったことは、間違いないのである。  
何はともあれ「ピッポ新聞」200号おめ  
でよう！

森山摩見子 二十年来の友人

## 小さな本屋の恐るべき新聞

1988年4月、いきなり原発批判を引つ  
さげて登場したピッポ新聞が、とうとう2  
00号ですか。これは伊藤さんのあふれん  
ばかりのバイタリティーのたまものですね。  
いや、まったく元気ですよ。本屋の新聞だ  
から本の紹介は当たり前。一貫した痛烈な

時事批評と釣りや山登りの話の他に、コン  
サートあり、自然教室に実験教室、ヨーロッ  
パの玩具もあれば絵本の原画展の企画もやっ  
てのける。最近じゃあ、「大型絵本」のこ  
とで、天下の福音館に食い下がることなど・  
。

げに恐ろしき新聞なのです。それに、こ  
の新聞を出しているのが子どもの本専門店つ  
てところがいいですね。本ばかりじゃない  
けれど、子ども相手つていい加減なことが  
出来ないはずなのに、表面だけ繕つちゃう  
のって結構ありますよね。そんな中、良心  
的だと思います。

ピッポさん、マッターホルンに登るまで  
新聞は出し続けなければ駄目ですよ。つて  
ことは、1000号くらいまでいくかな。  
八八八・・・。

佐久間雅哉 セブリ舎代表

## 事の起こりは五月二十七日 から始まった

五月二十七日、絵本を届けに来てくれ  
たと思つたピッポさんから、突然、「ピッ  
ポ新聞200号に載せるメッセージを書い  
て」と言われました。「締め切りは何時？」  
聞くと「今月中」との答。「エー、後少  
ししかないでしょう」と、私。「そう、でも  
よろしく」と言つて部屋からどんどん出て

いってしまいました。ピッポさん、ちよつ  
と、ちよつと、そりゃあんまりだよ！  
私が、ここにメッセージを書いたいきさ  
つはこんな調子でした。そんなわけで、あ  
らためて、子どもの本専門店ピッポ、そし  
て店主のピッポさんについて考えてみま  
した。

ピッポさんは昔から、ずっと真つ正直に、  
子どもの本と向き合つてきました。それ故、  
お客さんにも媚びず、絵本に対しての思い  
や意見をはつきり言う、この辺りがみんな  
が頑固親父と感じる部分なのかもしれない  
ん。傍らから見ても、もつと上手にや  
らばいいのに・・・と思つてしまうことも  
再々です。

でも、正直だからこそ、常に厳しい視点  
で絵本を見つめ、流行に流されず、自分が  
納得いく本を店に置く姿があると思います。  
それだからこそ、私達もピッポを信頼出来  
るのです。世の中に一軒ぐらいこういうお  
店があつても良いかなと思います。そんな  
素敵なお店(選び抜かれた絵本+頑固親父  
のエッセンス+太陽のような奥さん)と身  
近なところでお付き合ひできることも幸せ  
だと思つています。

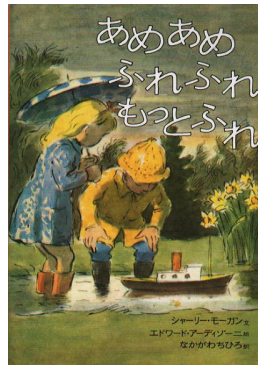
ピッポ新聞200号おめでとつございま  
す。これから、お店に、ピッポ新聞にピッ  
ポさんの思いを表していつてください。ちよつ  
とドキドキながらずつとずつと楽しみにし  
ています。

佐藤弥生 昔からのお客さんの一人



ねー、この本読んだ？

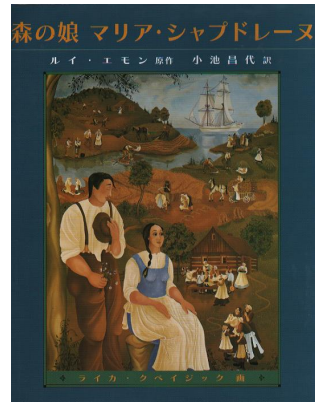
『あめあめ ふれふれ もつとふれ』(シャーリー・モーガン・文 エドワード・アーディゾーニ・絵 なかがわちひろ・訳 1155円 のら書店)



3日も降り続く雨の中、男の子と女の子は窓から外の光景じつと眺めています。雨の中では、花は生氣を得、生き物たちは動き回っています。新聞配

達の少年は水たまりの水を自転車ではねとばして配達しています。なにもかもが雨の中では、生き生きとしています。二人は雨の中へ飛び出していきたくて仕方ありません。しかし、二人はお母さんが許してくれないと諦めて、じつと見ているのです。自分たちも参加できたらと目の前の光景をさまざまに空想しながら・・・ドアが開きおかあさんが「さあー、外へ行ってらっしゃい・・・」二人は飛び出していきまし た・・・。子どもの気持ちを実に良く伝える文章と、アーディゾーニの絵がさらに子どもの内面の動きを生き生きと伝えてくれる絵本。雨の降る日に読んでやるうかな！

『森の娘 マリア・シャブドレーヌ』(ルイ・エモン・原作 ライカ・クベイジック・絵 小池昌代・訳1680円 岩波書店) この原作は「白き処女地」という名で映画化された古い



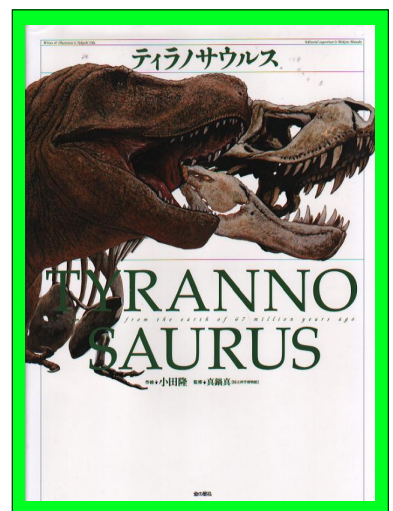
作品。マリアは森の奥深くの開拓農家の若い娘で家族と暮らしている。この地では誰もが誇りと喜びを抱いて労働をしている。春の芽吹きに喜びを感じ、夏の猛暑に協力して開墾をし、秋の収穫を経て、厳しい冬に備えるという人間らしい暮らしが営まれている。

そんな中、マリアは恋をする。だが、その相手が吹雪で道に迷い命をおとしてしまうのである・・・。素朴な形で人が生きていくって事がどうということなのかを考えさせてくれる絵本

『ティラノサウルス』(小田隆・作 真鍋真・監修 1890円 金の星社)

大型肉食恐竜ティラノサウルスがどんな生活をしてきたのかが迫力のある絵と、最新の情報に基づいて語られている。併せて、発掘された化石が、発掘現場から研究所に運ばれて、どのような手順をたどって、骨格の恐竜が再現されていくのかも語られて

いる。科学絵本



インフォメーション

3人のナチュラリスト展

(ソロー シートン 今泉吉晴)

自然を愛し、自然の中で暮らし、自然を通してものを見・考える3人のナチュラリストの世界を紹介する小さなフェア

6月15日(水)〜7月10日(日)

今泉さん訳のシートン動物記の新作(6・7巻)が福音館から十五日に発売されます。期間中に今泉さんのサイン会(日時未定)も予定しております。シートンの直筆のサイン入り手紙や、シートンの動物の絵が入った貴重なカレンダーなども展示いたします。どうぞご期待ください。